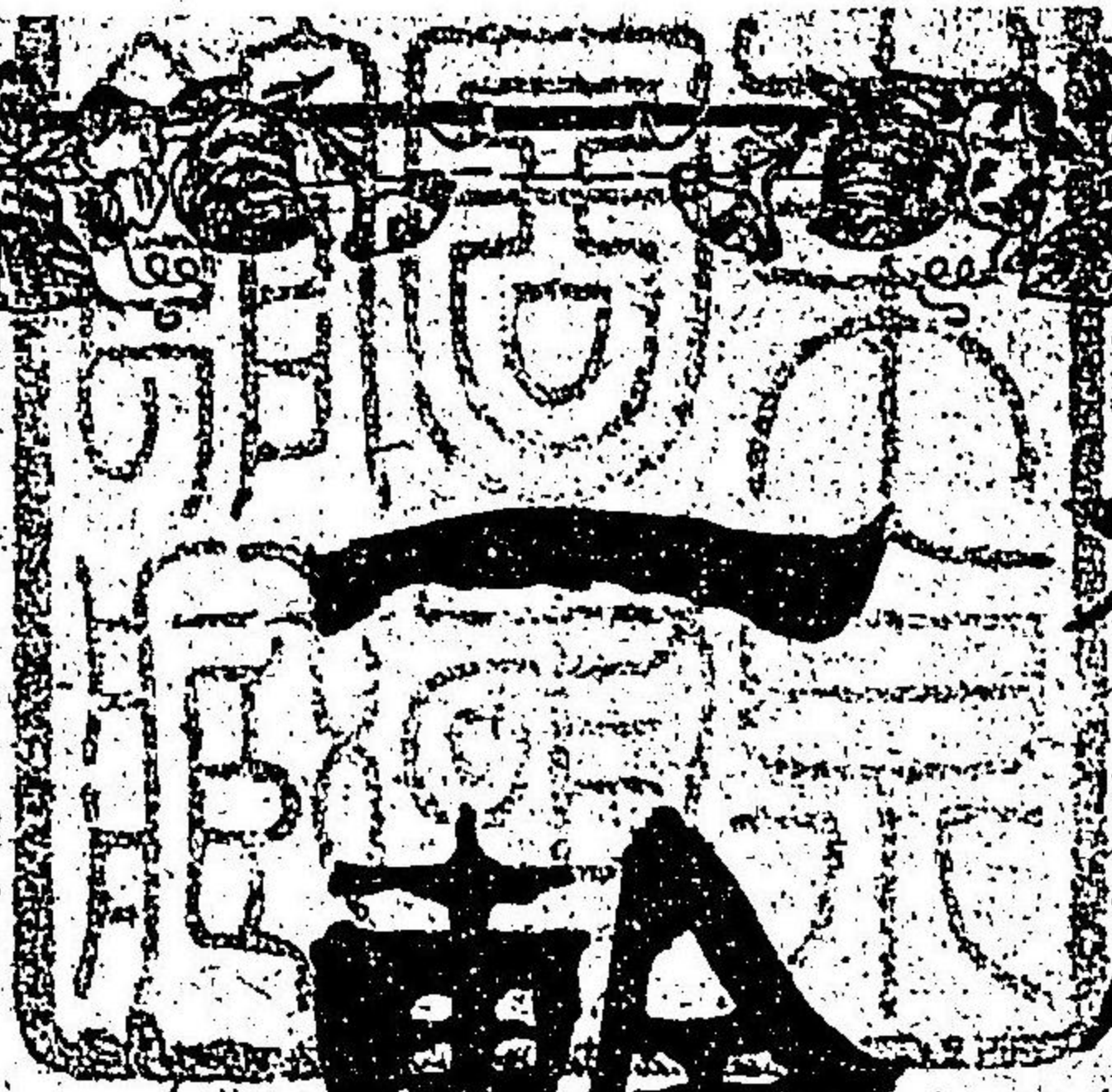


特13  
534

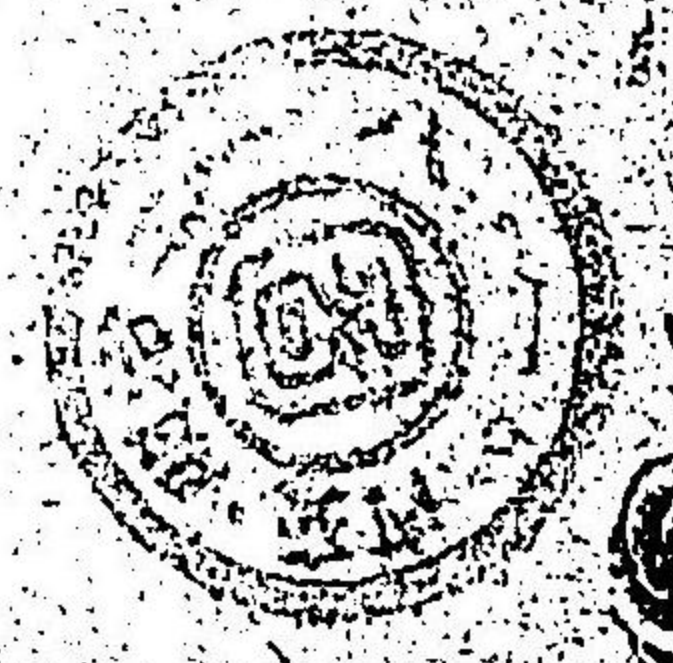


九山竹園居士筆記編

輪奐牡丹花

全

森當籤堂梓



一輪は牡丹花序

櫻は散り、藤は辭して、花信漸々疎々、唯來春を期するのみ、偶々親友丸山氏弊寓を訪ひ來り曰く予頃日一株の牡丹を文園中に栽培し、其花將に綻びんとす、幸に評せんと居士稿を取り熟見るに其容姿の艷麗優美ある、黃薔薇を三舍を避くべく、其花神の高尙温雅なる、雪中梅も遠く及ばざるべし、其色は粲然園裡に秀で、才子案を拍て稱ふべく、其香は菲々園外に溢れて、佳人袖に掬して愛すべし、葢城山君が卓識巧に西園をり

譯し植へ、丸山氏が得意の速記術、敢て一葉片枝を傷けず栽培其宜しきを得たりと謂ふべし、曾て聞く牡丹は花中の王なりと、然て此花亦王中の主人公ならん歟、今や花時遙にして此清觀あり、是文明の餘澤と云ふべし聊鄙辭を述べて序に代ふ

明治戊子初夏於南陽寓舍

東酬居士記す

はしがき

おのれことこのむづきのまへ、城山うくのすゝ  
 免よて、ともに東都へあゝまだおぬ、ある日やよ  
 ひの空のほがらゝさ、花のたよてもをちこちに  
 わたて上野の公園を、いまをさかりの頃とく、  
 魚ば、よるのあらゝのたらひもあれば、あまをば  
 またむもいとおいと、城山うゝをはじめむつみ  
 あへるともあちど、うちつれだちてさくらがり  
 にどいでゆたぬ、さるゝどに夢の日もはや西山  
 にうすつきて、たうがまの頃とありゝかば、ひさ  
 ゆふげをど或るまづかなるいほりにはひり照、

ゆふげもぬうべおはりて、よもやまのはなりの  
 すゑつおよ志急きすびひあ翁の著作のとにわ  
 たすぬうの空き城山字一のひをるゝには(か  
 翁のものを履きしもかつあれども、うがうちい  
 ともめでたれもはを、まあちやんと、おふべにす  
 どなむひへる一まさならぬ、おのれ過ぎつる頃  
 あめりかにたびねのをり、うが一曲をう奏し、  
 ともあり(が)空ことばのいぬだれやらぬに、  
 席に洗らあるもろびとは、皆まぢく、せひに  
 うがはな(を)なしてよ空、せつにすゝむるもの  
 から、う(は)さらば記憶(ある)だけをはかす

べし)と、さてころ一席はな(を)ばな(に)ちり、を  
 のれかたえらにありて、こはひとおも(う)後  
 ことよぞあると、う(の)咳一咳(する)と、空もよぬ  
 でとりて例のみ、づもじをて、ことばのはやど  
 りをぞこゝろみぬ、さはさりなが履光線のぐあ  
 ゑもひるとちがひ、ねぞらいナ天井にはひと  
 元の燈火はおはせ(な)れど、うきぐものさへき  
 りてかほはくらくとれもふやうにそうつらぬ  
 がちに(と)ありにき、あへりてひまあるおりくに  
 譯(ゝ)ぬるが、盈(が)て小ぎなる一はきとはなりた  
 り、さる(や)どにようじもはてければあづまを

聖にこそ浪華津にかへり來りしが、この頃ふみ  
 屋のあるじの訪ひ來て、あづまのいへつどにな  
 じがなれもく海きものはおはさずやど、いつく  
 かつく蕙のかたへにうづみれきく、彼の志たが  
 きを見いで、このふみころ、いとれもく海きも  
 のなれ、植字のすり巻につくりねど、あはれた多び  
 こはるゝものから、いまは志かすがよいなむも  
 なにと盈らさばとてふ星がななどくわへよ  
 むにたよりに寄やうにかゝつ一輪の牡丹花と  
 名づけて、かう世にあらはすとどはなり怒さる  
 にてを此ぬみ狹見る人、ゆえかきとりわざのつ

たなきをばどがめたまはで、うゝのかた星のべ  
 たるあゝ海狹あう、くみて味をひ給はらば、さぢ  
 いとおほきことになん、時に明治廿一年といふ  
 どののさつ死す蕙つかたかくまをすは此のぬ  
 美のあきて丸山はなにかゝ、

一輪の牡丹花

竹園居士筆記編



一輪の肉一輪の花能く其義理と人情とを辨へ、朋友の  
 義小人の苛虐、情更に誠意愛戀、婦女の貞烈、智識等所  
 有、情海の大波瀾を僅かよ一小冊子の中に収縮し、文章  
 流麗にして且つ簡易に言詞輕妙にして且つ短簡に趣  
 有妙絶意深奥、奇話佳境の餘意に於て自づから世間  
 有情の癡痴を以て所謂の樂而淫せず、悲而傷らず、  
 情理想の趣きを悟らざるものは彼のセキスピーヤ  
 先生が戯著たる **MARCHANT OF VENIS** といふ俗に所  
 謂斤肉裁判の透逸なるに及くものあらじ、宣なる哉、世

間是次譯述敷演するもの、夥多なるや、或は意譯して之を冊子に編み、或は翻案して之を新聞紙の物語りに綴り、或は又之を輔張改竄して戯劇に演じ、その骨を換へ体を替ふるも、素より一にして足らずと雖も、多くは譯述未だその骨髓を貫淹し、その蘊奥を尽去たるものあらず、所謂隔靴搔痒の憾ありを免れず、將た何ぞその原文は玉の如く、譯文は瓦の如くしてふ、批評を脱せんや、茲に於て今その原文の要旨を取捨し、且本邦婦女子が情想に適合し、好尚に切當ならしめんと欲し、乃ち之を口述敷演して以て友人の一笑に似す事とはなり、然、併しながら固より之を世に公にするの意欲なく、唯

だ友人會話の座興と供る迄の戯れなれば、その述る所の言語、云ふ所の詞藻等、凡て平常の俚言の儘として飾らず、作らず、ア、うればソートと、エーこれはユートと、唯有のまゝなる演述なれば、さぞ聞きくるべき廉々も澤なるべしと、傍への白湯を飲一飲、咳一咳して即ち左にその大概をお話し致しませう。さて伊太利亞と云ふ國は、世界でも極く古い國柄にて、所謂「コンセルバチーフ」なる即ち保守黨で組織た制度にて、兎角貴族門閥を神の如く尊敬なす習慣があつて、貴族と平民との對峙はゆるされず、其の懸隔の差は月に鼈もものかは、貴族は平民をば奴隷視し、平民は貴族

一 對しては泣く子と地頭の如何とも嗚呼儘からぬ浮  
 世ではあると不斷嘆息するのみにて爲す術もなかり  
 一 世の情態うして此國の習慣よて裁判官や代言人あ  
 ど公庭に出頭の際は法服とて一種特別の服を着るマ  
 スクとて假髪を冠るなどの事がある、勿論現今に在て  
 も歐洲諸國よ此の習慣が残つて未だに行はれて居る、  
 だが我國にては斯ふ云ふ例は未だ曾て無い。  
 其昔時此伊太利亞國ベニスと云る處に、船積の商業を  
 渡世にして、今の蒸氣船に代はる程の帆舞船十五六艘  
 を所有して各國との取引もくげく最富有に暮すアン  
 トニーと云ぬ人があつて、其性善良にして品行方正わ

きて慈惠深くて、人を恵み人を救ふ美しき義氣のある  
 は此人の長所で貧民などよ平生よ施こく戎爲すなん  
 どは其數を知らん程で中々慈悲心に富んで居る人だ  
 から其頃ベニスに義俠者とてアントニーの名は都下  
 に著く知らぬものもないほどであつた、さればアント  
 ニーの人物を慕ひ望を屬し交際を求むるものも多  
 て益々アントニーの名は高なつた。  
 然るに其朋友の中にてはわきて親密く交際れる一少  
 年があつて、其名をバツサリーと呼びベニスの人で今  
 日もアントニーの寓居を訪づれ來たりしが其年齢  
 は廿年の上を四ツ五ツもこへくと見ゆ背高く色白く



眼パツチリとして、鼻隆く眉根凜く、口許に愛嬌ある  
 鹽梅は如何にも氣高く立派な好男子であるが、いと零  
 落せしものと見へまじびたる衣服を着け靴にも破跡を  
 あらはせしは、其人品にはナト不相应く思はるが、これ  
 には事情のあるとて、元このパツサリと云へる人は  
 幼稚どきに生の父母に別れ、親族の家に養なはれ、程  
 の身にあれば、諸事もの足らぬ勝にて、衣服なんどの  
 調度も撰ぶに由なく、自由にて生育たが併し、教育は  
 立派よ受て、殊に其性伶俐にして、才識も高き頗る温厚  
 篤實の風あて、中々の勉強家であるから、其學べる文  
 の道も妙を得て、縦横自在の健筆なれば、朋友の嘆賞世

人の評判なかくたいものなり、處が其當時風流  
 もて都下に鳴り響いた高尚なる雑誌の刊行ありしを  
 幸ひ不斷にパツサリは此雑誌へ風流なる佳致ある  
 好文章を無名子で投書爲し、獨り此上なき快樂と爲し  
 居りし、されば身の貧しきは此快樂の爲めに打消さる  
 て左のみ苦勞を思はねば、身の飾装などには無頓着  
 で一向構はぬなるべし。

所がアン・トニーは此のパツサリが身の貧しきには似  
 もや、殊に心裡の美志と將來望みある人物なりや、以と  
 も信用厚ありければ、つねに同胞の兄弟の如く物足ら  
 ぬ折などには必ず金圓物品、何くれとなく分ち與へ交

誼も幾層細やかなる、されば平常に心の裡で思ふやう  
 彼のバツサリーは精神の美しくいものでうして學識も  
 拙なからず誠篤實な男だからいま一層勉強させて  
 見たいものだ……どうも下宿屋の二階にばかり  
 屈んで居て伊太利亞人の癖とも云べき美術にばかり  
 心を寄ては悪い……どぞか彼の人は適れな政事  
 家に爲て見たい必ず立派な人物になるだらう、ト斯思  
 ひ立ては寸陰も待どうにてきてころバツサリーを呼  
 びに遣はせしなれ、バツサリーを何用のあるとならん  
 と氣づかはしきやうきアントニーの内房に這入して  
 來たアントニーはバツサリーに向ひ「オ、バツサリー君か

……ア此所へ掛け給へ、今日君が呼びよ遣つゑを少  
 志話があつて……時に君ヨ君は未だに彼の風流雜誌  
 へ投書をして居らるゝだらう。中々妙絶な文章で此都  
 下で無名子の投書と云やア誰知らぬものもな以非  
 常の評判であるが……併しバツサニー君ヨ何時迄も  
 風流の投書が爲すのみを快樂にして居て可惜月日を  
 経過のは實に惜しいものだと思はれるが……どうだ君  
 モウ一層奮發して「ライオン」學校へ入學て卒業する氣  
 はないか私も君を便りに思ぬから云ふのだが……其  
 氣があるなら萬般の費用は私が送與からト深切に話  
 を爲たずるとバツサニーは嬉しうに君の御厚志は

實に有難い私にやうなものをする程までには思ふて下  
 ざる御深切有がたい私も其希望を最初あら有るので  
 すが君も知らるゝ通りの今の身の零落如何爲やうに  
 も仕方がない……有難い。デハお言葉に甘へる様すが  
 何分宜しく願ますアアントニー「宜しい明日あらでも。ト  
 云ふので遂に「ラティン」學校と云ふ有名な學校へ入學  
 させた。

うも此「ラティン」學校と云へるは此伊太利亞國にてを  
 盛大なものので今の大學校よもれさく劣らぬ程の壯  
 大美麗其授くる學課も高尚にて殊に古の國風だから  
 先哲の學派を慕ひ或はソクラテスが深遠萬尋なる哲

理の高きを仰ぎ或はアリストートルが濶奥微妙なる  
 實學の流れを汲み哲理政治法律經濟工業航海の術語  
 學など専ら教授に力を尽すので本國のものは云ふ  
 もさら他邦の人も笈を負て此校に入學するものが多  
 いわきて此の當時は大學校と云ふものがなかつたか  
 ら此學校を卒業すればたいした名譽である處がバツ  
 サニーは就學の後一二年を経過たが一日のこと運動  
 ながらの逍遙に市街をツト歩いた處が人間は妙な  
 もので情の奴隸には違ひない。フト遇たは素的な美婦  
 人。どうも高尚立派な……美艷い貴麗だと思つたはか  
 こで物云ふさへ何とやら仕方がないので別れて歸へ

つたがうれよりは其貴嬢が目の先にチラツイテ堪ら  
 ぬ感情を起したか又熟々と顧慮して見れば自分なが  
 ら生意氣なとだ義侠人の世話よなつて今は大切の修  
 業中途……ア、馬鹿な心を出ては成らぬと一時は  
 情慾の心の駒さるくる以出さうとするのを手綱をし  
 えて壓へて見たかどうも人間と云ふものは少くは快  
 樂が無くては往かんと思ふに任せ、また例の風流雑誌  
 へ餘暇さへあれば投書して楽しんで居つた然るに其雜  
 誌中に誰やらん實に妙文章を無名子にて投書すゑを  
 のがあつて時々掲載であるこれは奇だ妙だ已ほどの  
 文章家はこの雜誌へ掲載する中には有るまいと思ぬ

よ、如何にも立派な好文……どうも妙絶誰だらう其  
 人物を見たものだ望斯ふ思ふは學藝上さもあるべ  
 だ話である。

説話轉じて此ベニス府より程近き處にベルモントと  
 云へる片田舎あり其景色の麗あさ、鬢鬘たる霞に野邊  
 の色をあらはし、樹木は所々に小森成爲して青々と黄  
 金を敷けるが如き畑の面道端には人待顔に咲いつる  
 草花の愛らしさは塵芥に埋もれる都下やはうつて變  
 りし風致あり其が中に少く小高き處に風流に佳致成  
 供へし一構おびぬぬ古風な別荘が有つて庭園には藤  
 かづらの心造がりたる美しく、片傍に直す鸚鵡の鳥籠

此方を見れば薔薇牡丹の紅く白く咲匂へる鹽梅なん  
 ど、どう見ても風流隠士の居住と見ゆる、此家に一人の  
 ポルチヤヤ云ゑる貴嬢あり、芳齡の頃は二九には二ツ  
 もあゑる、空見ゆるが其風姿のなまゑるさ、春柳に風も  
 ものかは、翠の髪カミの艶麗ツヤカく、色は高峯タカミネの雪ユキとりも白く、  
 花の顔オモ貌カ月ツキの眉マユ、眼メもと清スミく鼻筋ハナスネ通ス、口許クチマのキリリ  
 ツとしまりたる處は、高淑タカソク見ゆる字ジぢに無量ムリヤウの愛嬌アイケウを  
 ぞ合あなる、いとも得えかたき美人メイジンなり、うも此家は貴族中  
 よても殊ことに古ふるき門閥カドにて許多アヤマタの資産シヤンを有あ、誠まことに豊富フコウ  
 に暮くらゝあるものなるが、さゑにてを天てんを人間にんげんに欲ほを満み  
 さないもので、此貴嬢の外ほかには兩親リウシンも兄弟ケイテイも皆みな黄泉客ヨミヤク

の數かずに入り、とて、今はたゞ此ポルチヤ嬢一人にて下  
 婢ヒメ下男ゲオを召使めいひ家政カセイを執とて居る、だが此貴嬢は單ひとり容  
 貌かほの美うなるのみにあらず、幼少コウショウの時ときよ、學問ガク、技藝ギゲイ、何なにく  
 れとなく勉強ベンケン、殊ことに文學ガクは高尚コウコウな學課ガクをまへ修おめた  
 る程ほどに、あまは樂たのしみがてらに、此の貴嬢も矢張や文章ブツ  
 を弄もんで彼の風流フウリウ雜誌ジへ無名子ムメイシで投書テウショを爲なすを愉快ウキ  
 の友ともとし居おり、然しかるに此貴嬢の驚おどろいた一ひとツの事柄コトバと  
 云へば、近頃キンコンは妾めかけに上あこす文章ブツ家カはあるまいと自分じぶんか  
 ら口くちばしる程ほどに思おもふて居いたに、議論ギラン高尙コウコウにして文詞ブンシ豊ゆ  
 麗れいどうも一点いっとして批議ヒギ点テンのな、妙文章ミョウブツの投書テウショが時  
 々とき現あらはれるが、これは一体いっ如何いかなる人ひとだらう、と字じか其

人を見たいものだも頻りに思ひつゝ居つた。  
 折しも或る紳士の催ふにかゝる夜會があつて名高  
 び人々を招待した處其内には彼のポルチヤ嬢もバツ  
 ツサニーもアントニーも臨席した處が或一人の客がバ  
 ツサニーに向む「どうも近來に無才筆の投書が彼の  
 風流雜報に無名子で掲載してあるが、あれはバツサニー  
 君君だらうなか」これ美事な事であると此賞讚の話  
 が恰度ポルチヤ嬢の耳に這入た、ポルチヤは豫てよ  
 り彼の無名子に遇たいものだと思ふて居た其人が彼  
 のお方……オヤ意外に若い人だと心中は如何なる  
 感情の起り來るか紅葉を顔に散らして眞赤處がポル

チヤ嬢と椅子を列べ一人の貴嬢は此方に向ひ「子貴  
 嬢どうも何でせうヨ貴嬢も無名子で御投書になるが  
 彼風流雜誌の中でも貴嬢の御文章を除いては彼處に  
 お在の……子ら向ふのサ彼のバツサニーさんでせ  
 う餘程お立派な文章で有ませんかト側のはなゝを  
 耳朶に觸れた一少年オヤ誰だ巳の外は載る無名子の  
 投書家はどふり向たどたんに其顔を見れば是なんバ  
 ツサニー「チヤ男だと思つたに彼の……オヤ貴嬢かど  
 能々見れば去る日散步の折しも市街で遇た彼の貴嬢  
 ……」どうも奇遇だ……婦人デア、云ふ文章を書のだ  
 ものを……堪らなは是は妙だ此都下にもア、云ぬ

……どうも美しいト木石ならぬバツサニ其感情の指  
 鍼は愛と云ぬ字の方角は轉じて戀と云ぬ字に向つた、  
 此方のポルチヤ嬢も同じ思ひの方角は指ども門地門  
 閤を尊む世の中とて平民などよは物云ふさへ何とや  
 ら、まして面識なき男子如何に心に慕へばとて、まさか  
 チト寓居るお遊びにやも云はれず、たゞ世間話の二言  
 三語で其夜は別れて歸宅たがバツサニはフリト一  
 の理學も修て居るとだからナニ彼も女なら己も男  
 だ、如何かして懇意に成て行末の話が爲て見たいと思  
 ひだ、さては無茶苦茶に其よりと云ぬものは、サツバリ  
 勉強もせず、ぬゝ寐ても覺てもポルチヤが氣にかゝつ

てならん、併し考へて見れば貴族と平民との交際は中  
 々六ヶ敷……況して今ではアントニ義人に學資を  
 貰はて居る身の境界だ……こりやア一婦人の爲に……  
 ……有爲の志想を失ぬては……最う一と奮發せにやア  
 ならぬや良心か、刺激するが感情の鍼先はどうもポ  
 ルチヤ貴嬢の方に兎角向きたがるが、又理想の打かつ  
 て考へて見ると斯ふ己を世話して呉るアントニ義  
 人も己が可憐と思ふはこゝろ、どうも幾等慕はく思へ  
 ばやてあゝ云ふ貴婦人に交際をあと……馬鹿く……  
 い事は謂れぬと道理と情々の爲に心經病を起して腦  
 裏はさながら沸が如死大戦争で、たゞ盆鎗と撃ればか

り考へて居つた。

然るにアントニーはバツサニーがこの頃は何となく  
盆鎗鬱積て居るから心配でならん、如何した譯だらう  
か同人は遇て聞て見やうとバツサニーを喚んで時に  
どうを君は昔の様な勇氣が近頃は無い様だが何か氣  
に成るとでもあるのだらうか、う鬱々して居ては身  
体に害らうあら、ト活潑爲給へ……君もなかくの  
勉強家だから何時の試験にも落第しぬともな、どう  
も當年の内には立派に自立の出來様を爲たいと思ふ  
は、だ併志商人の事だから思はしく行か行ぬかは譯ら  
んが少々儲るともあるから實はア、して斯ぬ志とど

心目算をして居るが、どうも此頃は顔色が悪い、まの  
中に保養志ないと行かんヨ……吾と君のなかだ何も  
隠さず、に隔意なく話して呉たまへ、云はれてバツサ  
ニーは、たまりの悪字にもじ……爲て居るアントニ  
ーは其容色を見て取て「ハ、ア何か氣に懸れて居ると  
か……こりやア解了た、うれ此間の夜會の際に遇た……  
一輪の牡丹花であらう。ト星を指れてバツサニーは  
面を赤多して實は其牡丹に……貴郎のお世話に成つ  
て居て斯ふ云ふとを申しては濟はせんが私はどうか  
彼の貴嬢と交際を爲て見た、彼の貴嬢の文章は立派  
なと實に驚きまゝ、ううして貞操の淑女を見受ますか



ら是非に交際を求めたい、併しどうも自國の慣習で貴族と平民との交際を兎角に面倒で爲惡い殊に此様活的な風では彼れ貴嬢とはどうも交際がト半分聞ひてアントニー「うれ位の事か世話も苦もな以其様な心配なら何でもないとだ……イヤ、くだら惣とで三年の辛苦が水泡に属する處だつた……うれなれば立派な扮姿に成つて交際を爲たら宜いだらう幾等あれば足りる……、五千弗もあれば宜しいか「バツサニ」有がたい私も貴郎より便るべき人はあいか「恥か」さを忍んで申し出るので……、早速の御承諾で有難い最早學校を試驗濟になりまゝか「是」よりは政事社會に喙を出

して見たいから此上とも何分よも宜しく願ひはす「アントニー」承知致し、明日金圓をあげやうと受合た「バツサニ」は夢の心地で歸寓て來て大喜び種々の考ゑを起して一週間經過んうちに貴嬢……、一輪の牡丹に無暗し喜こんで居つゝ、アントニーは金圓を渡うとは引受たもの、金を生憎手許よは無し預け金を取戻うるか貸金の返濟を……、どうも間に合ぬ併し一たん約したも、金を今更に金は出來ぬと云ぬのも氣の毒だ、難義の時に調達爲て遣らねば面白く無と流石は義侠人のとだから、以ま手よ無くても二三日過れば入港の貨物を載、船も着、直に如何ともなる一時の都合だ、あ

金圓の調達を爲ねばならんと思案はうち、フト思ひ  
 出せし事はありて、オ幸ひ彼のサイロクに、……るも此  
 サイロクと云ふは日本で所謂穢多の様なもので彼の  
 基督を殺したとて歐羅巴人には非常に憎悪て居る猶  
 太國のもので去る頃より此地に移り住るものだがう  
 の性質邪惡にして道義もへちほも知らぬ奴で憐と云  
 ふ字は字引のうぢにはないと云ふ無宗教家で實に忌  
 はしい奴だ人と交際をすゑではなく極の殘忍酷薄だ  
 から人々よ惡まれ嫌われゑとが甚し、此男は高利貸  
 を家業にして内々は有福で暮して居るが兎角に不當  
 の利子を貪つて人を苦しむるとを何とも思はな、ア

ントニーは其の不當なのを懲して諭すとも度々だが兎  
 角陽では従がふ様に見せても中々邪曲だ根生は直ら  
 ざ却つて之を忿怒つて怨んで居るアントニーは彼れ  
 に借やうと思ひ出しては見たもの、餘り進ないがナ  
 ニ一時の融通だから……利子さへ多ければ貸して呉  
 るだらうトサイロクの處に参つたサイロクさん誠に  
 申兼たお頼みだが少し金の入用とが出来た所が今  
 手許の金は悉皆拂出して仕舞てナト間に合はないが  
 利子は何程でもあげるから五千弗丈ナント二三日の  
 處貸では下さるまいかと云へばサイロク變的な奴で  
 眼などキヨロくと可憎面をしてへ、ナント豪傑日

項は私を疎じて人で無の犬畜生のと能も公衆の中で  
 面恥をかゝせて呉た……何ぞ犬のやうなサイロクに  
 金を借る道理をあるまいマア其様なものぢやアあい  
 かアハハ、(嘲笑)馬鹿を戯談を云はつしやるなエへ、  
 〇アントニーは失敬な奴だと立腹はしたが面に現さ  
 ざらふなら宜しい斯ふ爲やうに隣家同志のことだか  
 ら信用貸にして下さい未だアントニーの資産を五千  
 弗位の價值が無いともあるまいろして二三日過れば  
 船を當着するとだから二三日の處だ頼む「イヤ」后  
 來は信用貸などはせぬ方が宜しい何か慥かな抵當が  
 あるなら貸しませう」サア其抵當と云ふても家庫を入

れた處で聞き入れまい……其他には私の体より外に  
 ……じやア私の支体の内の肉を一斤丈抵當に入れや  
 う決して返済の期日を違へない証據だと云ふを聽て  
 サイロクは何と思ふたか點頭で「ホ、引肉を一斤……」  
 れは面白い証書を書給へ貸て上やうと急に容子が變  
 つて來た「それは忝けないとアントニーはサイロクの  
 言に任せ返済すべき期日に一分時間だも違約すれば  
 自身の肉一斤差出らうと云ふ明文を書いて金圓と証書  
 の授受を済んでアントニーは我宅へ歸つたが其翌日に  
 なるにバツサニーは嬉しげに訪ひ來りしがアントニ  
 ーが心の裡で心配を爲たと知らぬアントニーは宗

教家の癖として苦心の程を誰にても云はぬと云ふ精  
 神だからましてバツサニーは何よりも知らせまいハ  
 ツサニー「誠な昨日は御心配なと初願ひまして、ナニ五  
 千弗……其様みやア入ません学校の借費と送別會の  
 費用と相等の家屋を借りるのと衣服の調度さへ出来  
 れば……アントニー「ナニマアいゝから持つて往給へと五千  
 弗の金圓を遺て仕舞た「それは誠に有難いとバツサニ  
 ーは涙をこぼしてアントニーの厚志を謝して歸つた、  
 サア嬉しいからバツサニーは今迄のみ氣にせぬ身  
 の裝飾もいまは一輪の牡丹花の香りに上氣せしもの  
 よやあらん心有頂天になつてソレ服は「フロクエート

ヤレピンは「ダイヤモンド」と種々様々に美を盡し立派  
 に裝飾が出来た流石はバツサニー今までの貪書生と  
 は打て變りし高尚な堂々たる一個の紳士となつた、  
 おで交際の道具を揃ひたればとて借馬車に乗て出掛  
 けたが中々其風趣の上品な處はたゞ貴族の若公にも  
 劣らぬ立派な暫時にしてヘルモントなるポルチヤ  
 の宅前に参つた名刺を出して案内を乞ふと取次の者  
 が其由を傳へた、スルとポルチヤ嬢は嬉しげに「ナニバ  
 ツサニーさまが越になりしと……馬車に乗て立派  
 なれ姿で……う其れは過日の新聞にも學校は御卒  
 業になつて獨立を爲ると云ふとが記載て有つたが

マア客室へは通し申せと、ポルチヤの差圖に美麗な風  
 致ある一室の裡に招じた少時ありて、ポルチヤ嬢はし  
 づくくと入り來り、饗應しつゝも去る項の夜會に遇し  
 時より此かたの情想を俱に打明て談數刻にわたり其  
 日は別れて歸つたが、それより度々バツサニーはポル  
 ナヤ許へ訪いける程に大分交際も親密になつて來た、  
 或時バツサニーはポルチヤに向つて云ふのに「貴嬢は  
 独身で在のと私も單身……義人の世話になつて  
 今日地位に到りましたが、ナント貴嬢が私に許すな  
 らば共々に九十九歳の末までも苦樂を俱に致し度  
 貴嬢の御胸中は……ポルチヤ貴嬢をばづかしげに「妾

もろう思ふて居りまするが御存知の通りの身分で貴  
 族の資格を云ふ妾の家は此伊太利亞國でも極古い家  
 柄でありまして代々家例が……と云ひかけて最と云  
 ひにくき様にて「若し此家で婿を向へるとあらば祖先  
 より傳はりました寶器のうちにある遺言狀を開いた  
 ら方に伉儷を結べよとあります……斯ふ申しますと  
 ナト學問上から云ふと可笑い話ながら妾も家例に  
 背き情に溺れて我儘を爲たと云はれましては残念で  
 ありますから其寶器をに當に成りましたれば妾より  
 ね願ひ申して伉儷を結び度若に當損じの其時は失  
 禮ながらうれ迄の御縁と御斷念下さらねばなりません

んと表面では立派に「コンセルバチーフ」の格式だが我  
 意中の其人のどうか當ることなはぬ様にと心の裡では  
 神にや祈るならん。  
 暫時して恭しく倉庫から取出させた三個の箱蓋を取  
 て見ると金銀珊瑚瑠璃瑪瑙なんど鏤た何とも譬へら  
 れん美麗なる寶に目を驚かしむるに餘りある黄金の  
 壺と白銀の壺と又一ツは見る蔭もない鉄の壺であつ  
 た。ポルチヤは起て云ひけるやう代々の寶器と申すは  
 是で御座り升此壺の中の何れにか遺言の書卷が有り  
 ますとのと其をに當になりましたれば貴郎に當家の  
 繼世を願ひますはれ約束の通りで御座りますと云ふ

さへ思ひの頬に出で、いと愛らしきろのさまは、微風  
 がサソくくと吹てきて牡丹花の匂をれくるにさよと  
 云ふ風情だ、バツサニも例の心經質、此處では一番鬱  
 伏かねばなるまい處が流石はバツサニ清き眼を見  
 開いて第一にある黄金の壺を斜眼んで云へるやう。  
 此壺ヨれ前の体は黄金であつて加ふるに白銀珊瑚、  
 瑪瑙、瑠璃杯にて飾りたてた風姿は美にして且つ佳致  
 ある寶に一個の尤物で有る、併しながら其實益を考へ  
 て見れば何にもなるまい此壺ヨれ前はどれ程に飾り  
 立たと云とて又眼を驚めすと雖も、抑も黄金と云ふも  
 のは美しくいと云ふとの眼に見るのみにして若しも

之を盲人に見せたらんには如何であらうか少しも其美を美とするに足るまい又其者の精神を動かすに足まい而して之れをして必要の道具に造らんか庖丁にもなるまい鐵炮にもなるまいなんと壺は前が使はれた御先祖も推して知べしだ、外貌ばかり美麗なればとて此のバツサニーの苟も眼中にはない。

ト取除て仕舞た、其次に列べてある白銀の壺に向つて曰はく。

此壺は前前の風姿も誠に美しくて矢張其容貌は黄金の壺と髣髴だが併し其實益の點から考へて見れば黄金と同様で少しも價値するよ足ない而して此壺も美

絶の裝飾を爲して爲こともなく數百年間を幽倉の裡にくらし居るが若も之れを他の美術よまれ工業よまれ、施したならば因理合數の道理に適ふて適れ世の利益を爲すべきに然はせど只外貌の美のみに誇つて實益を存じないであらう、是また必竟は祖先代々の恥辱である、此バツサニーは潔しとせど、前も我探すべきものにあらざ。

ト除て仕舞た、第三に列へし鐵の破れかゝりし壺を見てバツサニーは初めてニツユリ笑を含んで曰く。  
誠にどうも前は美しき壺である形を見ればボロくして居るが之れをして利用する時は莫大の價値ある

國利民福の利器となる、此壺こそ我が眼中に有り之れに這入て居るものなれば、必ら立派な寶物であらう、實に美麗いものであらう、此壺の裡にあればこそ御當家祖先の眞の賜物なり。

ト謂ひつゝ、鉄壺の蓋をとつて手を差入れた處が果して一巻の巻物があつた、サア一輪の牡丹は大喜びで「貴郎マア待なさい何が書て有るか妾にもチヨット……」

實益を主として此壺を當てたるものこそ我家系を繼べきものなり……云々と書て有る、ポルチヤは大に感賞して「いま貴郎の

御演説は此遺言狀通りで誠に安心致しましたと恥かしい思入で嬉しきうにバツサニーの手をとり握手も一層細かに、食堂から持ち來つた「シャンパン」酒を飲でバツサニーへ獻し無量の情を酒杯につぎこむ折から下婢は遽しくかけ來つゝ「バツサニー様アントニーさんから至急のね使で御座りますト手紙を出した、バツサニーは何事の珍事ぞ起りしかと急がしく其手紙を開て見ると何が書てあつたかバツサニーの顔はいと青ざめて今迄赤き唇も土色に變じてブルブルと慄へて心配なる体、其様を傍に見て居たポルチヤは何事とや思ひけん、貴郎其様にねかくし成らんでも宜敷じや



アありませんかと其手紙を見やうとするバツサニ  
 は吃驚して「イヤ見せられる品ではない外聞が……、ポ  
 ルチヤハはや我夫と思へば嫉妬がまじりポルチヤ「多  
 れは貴郎でも御座りませぬ如何に秘すべきとなれば  
 とて妾に見せられぬと仰しやるのは……、」サア見せら  
 れないと云ふは道理と事實があるからと暫時嘆息し  
 手をブル／＼震はして「實は相濟ぬとだが……、此遺言  
 状を當つて既に伉儷を結ぶの契約も貴嬢が許された  
 とだが我一身上實に人情忍ばれない譯があるから今  
 のに話はれ取消に……との挨拶ポルチヤは大忘りて  
 約束を破りなさるとは薄情だと今まで愛らしき容

顔に糸切齒があらはれた。貴郎其れは御無理で……、御  
 戲談にも程がある是れには何か他に約束を爲された  
 御婦人があるから此縁談を断り成るであらうけれ  
 ど今日の場合となつてはどうも人に面が出来ませぬ  
 ……理由も仰しやらせに断りに成るは貴郎に妾は  
 欺むかれたと思ふ……、夫程妾が嫌なら縁談は取消  
 に致おませうと大忿怒だ、バツサニは氣の毒をうゝ  
 宥めながら「マア左様お腹立てを困る今を申した理由  
 と云ふは耻かしい事だが私が貴嬢と交際をするよ就  
 ての入費に五千弗をアントニーから借り受けたので  
 ……、此手紙を見ますると其金圓は同氏が隣家に住む

高利貸のサイロクと云ふものに一時の都合で借りた金圓……若し約束の日限を違へたら自身の肉一斤を渡さうと抵當に入れたとの事然るに其金圓を返す日限までには遅くも着く筈の貨物に乗せた三艘の船は覆へつて仕舞い其餘の船も六ヶ敷と云ふとで不幸にもサイロクと約した三日の日限は切れて仕舞いサイロクは飽まで抵當に入れた肉を取ると云ふ訴訟を爲したとこれと云ふも常々アントニーが名望のあるとを嫉んで巧んだサイロクの悪計此手紙にもある通り今度は無残にも自身の肉を切つて取らるゝであらうとすら助かる途はない故私も其覺悟……君には最う逢

まいがどうぞ御健康でポルチャ貴嬢と伉儷を結び交情睦くお暮しなさる様にト「サア斯う云ふ事と知つたのは今が初めて……貴嬢に外聞が悪いと云ふたは斯う云ふ理由があるから……平民的の我々が貴嬢に交際をずる其入費に借りた金圓故肉を……義人の一命に係る處……斯く危急の場合に望んで知らぬ顔が出來ませうや例令我一命に代てもどうか救はねばならぬ……若し此儘で止たなら情慾の爲に義人の恩義を忘れたと世の人の蠟笑の種サア斯ふ云ふ止むを得ぬ事情ですから此縁談もお謝絶申したわけといと心配氣に談るを聞てポルチャはニツユリ笑を含んで此

方に向ひ「其れは一應御尤もですが……其様なとて大業が爲せるとではありますまい五千弗や六千弗位の金圓現して斯ふ伧儷を結ばうと約した貴郎……貴郎の爲に盡すのは當然のと……五千弗はれるか一万弗にして返しても宜しいからアントニーさんの危急をお救ひなさいませト云はれてバツサニーも漸く落付て心の裡で「こりやア左様だ己が一人歸つた處で救ふとは出来まいろんならポルチヤ嬢の云ひに任せて暫く金を拜借してアントニーを救ふが上分別だ」と思つたからポルチヤの言に随ひ一万弗の金圓を借受てす時も早く法庭へとかけ着け様とするを引留めポルチヤ

やは「ちよいとお待遊ばせ……アノ他でもありませんが貴郎と斯ふ縁談も決つて見れば此指輪を呈すから情願妾と思ふて矢はぬ様に嵌て下さいナと純金の臺に金剛石を差入たる美麗の指輪を取外してバツサニーに渡した「これは貴嬢の賜物有難いと受け納めて急ぎベニスの裁判所へ出て行つた。去る程にバツサニーは恩人の危急を救はんと急ぎに急ぎてベニスの法庭に來て見ると早開庭と見へ法官を始め原被両造書記なんどうれくの位置に併列びて今や審判の最中なり數千の傍聽人は整然として耳を傾むけ手に汗を握て各其眼は集合体を爲して原被

告の方<sup>た</sup>に注<sup>そ</sup>ぎて居<sup>る</sup>アントニーは卓<sup>たく</sup>然<sup>ぜん</sup>と起<sup>た</sup>ちて被告<sup>たご</sup>の地位<sup>ちゐ</sup>に居<sup>る</sup>其傍<sup>そのたはら</sup>に悪<sup>い</sup>姦<sup>かん</sup>い顔<sup>かほ</sup>をして居<sup>る</sup>は原告<sup>げんご</sup>のサイロクなり、アントニーは平<sup>へい</sup>氣<sup>き</sup>で「固<sup>ま</sup>より約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>に違<sup>い</sup>背<sup>はい</sup>して居<sup>る</sup>から渡<sup>わた</sup>すが正<sup>せい</sup>當<sup>とう</sup>と存<sup>ぞん</sup>あます金<sup>か</sup>圓<sup>げん</sup>は出<sup>で</sup>來<sup>き</sup>んから如何<sup>いか</sup>にも約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>の通<sup>つう</sup>り肉<sup>にく</sup>一<sup>いっ</sup>斤<sup>じん</sup>を渡<sup>わた</sup>さ申<sup>ま</sup>すと云<sup>い</sup>ふを聞<sup>き</sup>てサイロクはニタリ〜と笑<sup>わら</sup>ひながら「成<sup>なる</sup>程<sup>ほど</sup>其<sup>その</sup>りやア被告<sup>たご</sup>の云<sup>い</sup>ふ通<sup>つう</sup>りで違<sup>い</sup>約<sup>やく</sup>の上<sup>うへ</sup>は肉<sup>にく</sup>一<sup>いっ</sup>斤<sup>じん</sup>貫<sup>かん</sup>へば濟<sup>き</sup>とで何<sup>なん</sup>ぞ事<sup>こと</sup>新<sup>あらた</sup>しく裁<sup>さい</sup>判<sup>はん</sup>する程<sup>ほど</sup>の事<sup>こと</sup>は無<sup>な</sup>いと傍<sup>たはら</sup>若<sup>じやく</sup>無<sup>な</sup>人の悪<sup>い</sup>姦<sup>かん</sup>き言葉<sup>ことば</sup>折<sup>お</sup>からハツサニーは近<sup>ちか</sup>く進<sup>すす</sup>み出<sup>い</sup>で法<sup>はう</sup>官<sup>くわん</sup>に乞<sup>こ</sup>て云<sup>い</sup>ひける様<sup>よう</sup>被告<sup>たご</sup>アントニーに代<sup>か</sup>つて私<sup>わたくし</sup>が原告<sup>げんご</sup>人に五<sup>ご</sup>千<sup>せん</sup>弗<sup>ふ</sup>返<sup>へん</sup>濟<sup>さい</sup>致<sup>いた</sup>したいから只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>茲<sup>こゝ</sup>に持<sup>も</sup>参<sup>ま</sup>致<sup>いた</sup>しましたと云<sup>い</sup>ふ

を聞<sup>き</sup>居<sup>る</sup>たサイロクは吃<sup>く</sup>驚<sup>き</sup>しながら「イヤ今<sup>いま</sup>更<sup>さら</sup>金<sup>か</sup>圓<sup>げん</sup>は受<sup>う</sup>取<sup>と</sup>り〜もとアントニーは義<sup>ぎ</sup>侠<sup>ぎやく</sup>を以<sup>もつ</sup>て世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>に知<sup>し</sup>れし程<sup>ほど</sup>のものだ然<sup>しか</sup>るに今<sup>いま</sup>更<sup>さら</sup>約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>を破<sup>やぶ</sup>つて置<sup>お</sup>ながら法<sup>はう</sup>律<sup>りつ</sup>を履<sup>り</sup>行<sup>こう</sup>せぬやうなれば義<sup>ぎ</sup>人<sup>にん</sup>でも何<sup>なん</sup>でもないうれに今日<sup>こんにち</sup>日<sup>ひ</sup>では約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>の日<sup>ひ</sup>限<sup>げん</sup>より四<sup>よ</sup>日<sup>にち</sup>も過<sup>と</sup>ぎて居<sup>る</sup>肉<sup>にく</sup>を渡<sup>わた</sup>すのが當<sup>あた</sup>然<sup>ぜん</sup>のと〜こりやア肉<sup>にく</sup>を頂<sup>ちやう</sup>戴<sup>たい</sup>いたしませうヨアハ、と人の難<sup>なん</sup>義<sup>ぎ</sup>を外<sup>そと</sup>に見<sup>み</sup>て際<sup>さい</sup>どい處<sup>ところ</sup>で嘲<sup>あざわ</sup>弄<sup>ろう</sup>なすは憎<sup>にく</sup>みても尙<sup>なほ</sup>餘<sup>あま</sup>ある面<sup>つら</sup>構<sup>かま</sup>へ、法<sup>はう</sup>官<sup>くわん</sup>も非<sup>ひ</sup>常<sup>じょう</sup>に持<sup>も</sup>餘<sup>あま</sup>して居<sup>る</sup>たが改<sup>あら</sup>ためて云<sup>い</sup>ひけるやう原告<sup>げんご</sup>ヨ其<sup>その</sup>方<sup>ほう</sup>は左<sup>さ</sup>様<sup>よう</sup>な事<sup>こと</sup>を申<sup>ま</sup>すがもと法<sup>はう</sup>律<sup>りつ</sup>たるものは道<sup>どう</sup>義<sup>ぎ</sup>を含<sup>あ</sup>んで居<sup>る</sup>らんければならんに左<sup>さ</sup>はなく殊<sup>とと</sup>に被<sup>た</sup>告<sup>ご</sup>に代<sup>か</sup>つて其<sup>その</sup>方<sup>ほう</sup>に返<sup>へん</sup>濟<sup>さい</sup>の

義務を負ふと申すものゝあるにも係らぬ飽まで無情の  
 ことを申立が之れに引かへて被告アントニーには情  
 愛のある處を察するから被告の爲辯護人を云ひつけ  
 ると暫時考へて點頭つゝ「オ、ブラオン……彼は有名の  
 法律學士だ彼に命じやうと直に裁判官からブラオン  
 へ今日斤肉裁判事件に付き被告の爲め辯護を依頼し  
 たいから直に出庭致し呉る様にと使を遣た少時あり  
 て辯護人は法庭に這入て参つた其扮装を見るに「マス  
 ク」を冠り法服を着けて自國の風習のたと見へ「クリス  
 ナヤン」の十字架を持ち添たるが其纖手のなよやかと、  
 優々たる其風姿婦人にしてのみまほしき風趣あり法

官首じめ皆々もブラオン學士と思の外案に相違しブ  
 ラオンではなく一個の書生で有つた徐々法官の前に  
 進み言けるやう早速出庭致す筈でありましたがブラ  
 オン師は止がたき要件ありて私に代理をせよと申付  
 けられましたから只今出庭致しました法うれば残念  
 などであつた併し代理とあれば前に辯護を命ぜらる  
 がうは斤肉事件であると云ふを聞て辯護人は莞爾と  
 笑ひながらうは自分も兼て師より聞きける事件にて  
 判官閣下の命とも心得ません被告アントニーは肉一  
 斤を渡さうと申し原告は受取うと云ふとなら被告は  
 渡すが正當の話でさなくば法律の表が立ちませぬ原

告の請求通り渡すころ至當の事と存じますと聞いて驚いたは裁判官稍思案の体なりしが被告に向ひ云へる様「アントニーヨ其方も致方が無から渡せ、サイロクはカラ／＼笑ひながら豫て用意爲たと見へ「ナイフ」を出して靴の裏で研すまして居る、アントニーは依然として上衣から段々取はづし「シャツ」を開て「サア此處の肉を渡し爲やうと斬る、のを待て居る覺悟、サイロクは日頃の恐を晴すは此期だとアントニーの胸に押當がつた「ナイフ」今一寸、たつた五分で既に刺うとする時、辨護人は遽しく原告を呼とめて法官に向つて乞ける様「被告より渡しました証書を一應原告に於て朗讀ありたきものですが此義を原告にお命じを願ひたい法よるしい、然らば原告其方へ被告より差入れたる証書を一應朗讀致せと聞てサイロクはせ、ら笑ひへ、幾度讀でも同じと兎ても免れぬ慥な証文お望みとあれば讀上ませうと不平な面をして「ナイフ」を下に置き証書と取出して聲高かに讀上たすると辨護人は其始終を聞了りて「法官閣下に願ひます只今朗讀せし証文に若し違約せし時は肉を渡すとありますは辨護人も其事は承知致しましたが其なれば「ナイフ」でとるとはなりませんまい、如何となればアントニーの血は一滴も渡すと証書に書て無いから肉を血なして取ねばな

朗讀ありたきものですが此義を原告にお命じを願ひたい法よるしい、然らば原告其方へ被告より差入れたる証書を一應朗讀致せと聞てサイロクはせ、ら笑ひへ、幾度讀でも同じと兎ても免れぬ慥な証文お望みとあれば讀上ませうと不平な面をして「ナイフ」を下に置き証書と取出して聲高かに讀上たすると辨護人は其始終を聞了りて「法官閣下に願ひます只今朗讀せし証文に若し違約せし時は肉を渡すとありますは辨護人も其事は承知致しましたが其なれば「ナイフ」でとるとはなりませんまい、如何となればアントニーの血は一滴も渡すと証書に書て無いから肉を血なして取ねばな

らぬ是故障を申立つる所以の一であります、第二に肉は渡すと約束は致してあるが生命は入れてありません、又第三に肉一斤とあるからは秤は定めし所持致したらう一ゲレインでも多くてはなるまい、一斤だけ増減さざれば取ねばならぬ此三つて有ります若し此三つが証書通りに間違つて被告を死に致すとあらば謀殺律に當たるは明白なることにて原告もよく承知の事ならんト云はれてサイロクは眞青になつて震て居る辨護人は泰然としてサア此返事次第に依て肉を渡すととせんサイロク如何にと問詰られサイロク「ユ、ユレはどう願下に致したい是は、辨イヤ飽まで欲肉一斤遠慮

をせざと是非に取れ謀殺律に當るから、手續きは致して有る、サイロクは以前の容子は何處へやら畏れを顔に現して「ユレハ私が悪かつたどうぞ願下げを……其代りには金圓は入りませぬから……どうぞ此裁判は願下に致して欲しい……此時バツサニは進み出で、法官に申しけるやうもと本訴を爲すはサイロクが悪計である人肉を抵當にさせて契約証に書かせ生命を断んとするは實に忌はしく悪むべきとである、是れ無宗教家の本色であります併しながら若し原告サイロクは己の悪意を懺悔して悔悟を爲やうと云ふ「簡に成り人の人たる道を尽す事なら願下げを爲此バツサ

ニーが持参致してあるから金圓は返しませうと述終つてサイロクに向ひ「お前は法律と云ふものは如何思ふて居るか」と固と法律の道義の根本から成立たものだから道義を忘れて法律の表面のみを據ふとするところ必竟今日の様な失策を醸すあらと懇々と異見をした、處が遺のサイロクを閉口したと見へ差うつむきて悔悟の休云ひ甲斐ありしとバツサニーは金圓を拂つて受取証を取りなやアントニーより差入れた証書をも取戻して願下をなし事済となつた法本訴の事件は是れ限り明瞭であるから本官に於てを異論が無と之にてめでたく閉庭となつたが日己に暮る黄昏どき

數千の傍聴人の吾先にと后より續いて原告を初め辨護人其他の人々一同に退廷せしが歸途サイロクは既に謀殺律に科る處を助かつたので大喜こび殊更に喜んだはバツサニー恩人の危急は救ふし夫婦の約束を調ひ俄に花が咲たやうな毛ので大悦び辨護人はサツと往過て仕舞ふアントニーは既に危き處を助かり嬉しいに就て不審きは彼の金圓「バツサニー君君の此度の厚志は忘れない難有い……併し金圓は何處から……エ、ナニポルナヤ貴嬢からム、引流石は富貴の一輪の牡丹花……マ、其れはのちに從容と聞ふが、是非彼の辨護人にはお禮を爲なけれ



ばならん何ぞ謝義を爲なければ、するもバツサニー  
 は金千弗と取出して今しを往過た辨護人を呼び留て  
 云ひけるやう今日は貴殿の御盡力の厚きに依りアン  
 トニーの一命が助かり誠に有難う存じ升、是は輕少  
 ながらと辨護人の前へ差出すと辨護人は見向もせせ  
 否々今日の辨護は貴君方から頼まれたのではない、  
 私ハ師のブラオンの代理と成て参つたのだから此義は  
 平にお謝絶を申しますバツサニー、其ではお宅をお聞せ下  
 さい又お目に懸りましては禮を、辨イヤ其には及び  
 ませんバツサニー、其では氣が濟ませんから何なりとお望  
 の品を差上ませうと云ふと辨護人はバツサニーの左手

に嵌て在る指輪を見て「では折角のお進めなれば其  
 指輪を申受けませう」ナニ此の指輪……これは少々情  
 實がありまして一万弗、イヤナニ此指輪を貰つた人  
 に對し一言の禮も言はぬ内よ呈上るはどうも情み於  
 て忍れませんから此外のものなれば何なりと呈上ま  
 せうから、辨護人は大怒りて「其れでは入りませぬ申  
 受ますまいと急いで歸つて仕舞たずるとアントニー  
 は大怒りて「何だナ是位の指輪を遺たら如何だ平生の  
 バツサニー君にも似合ない吝な根性に成て仕舞たハ  
 「イヤ其れも斯う云ふ譯でポルチヤ貴嬢から貰たので夫  
 と言の事情を明さばに渡しては夫婦の情誼に、

歸宅つてポルチヤ嬢に告て直ぐ持つて來てお顔を立  
 ませうから「宜しい理もだハツサニー」お宅でも嘸お案じな  
 つてお在でせうから寸時も早くお歸宅くださいアントニー  
 「それでは此處でお別れを爲て兩人「明日從容とお目に懸  
 りませうと兩人は此處で別れたアントニーは家へ歸  
 つて見るとユハ悦ばし曩の報知に難船したと云ふた  
 のは全く誤聞で船は悉皆無事で着港て居つたさて又  
 ハツサニーはアントニーよ別れて心も不覺一目散に  
 ポルチヤの居宅に歸つて案内も乞はせと奥の内  
 房へ通るとポルチヤは恬然と椅子に倚掛つて居つたが  
 ハツサニーの歸りしを見て「オヤお歸りなさいませト

云つて「オホ、と何故に微笑しながら「裁判の首尾は  
 如何で御座りましたか」「ハイ、イヤモウ誠に難有實に全  
 日の様に都合克く參つたとは無い……審問の中途よ  
 り辨護人が這入て……一言の下に曲直を判然實に好  
 都合に參つてアントニーへの顔をたち安堵致しました  
 ……ア併し就ては迷惑千萬な注文を受ました其辨護  
 人へ何ぞ謝義をと云ひ出した處が金圓は手にもふれ  
 せ貴嬢から讓られた此指輪を呉と云ふが大心配など  
 でト額に汗をびつしより、ポルチヤは食卓から「ユツプ」  
 と「シヤンパン」酒を取出て如何に嬉しげに「酒杯」を執  
 てハツサニーに獻ながら情波を眼に漲らしニツユリ

と笑つて云へるやう貴郎ヨ其辨護人とやらに直に指  
輪をお渡し成らぬのは妾を能く貴郎の眞實は知りま  
したヨ……實にお頼母しうア、お嬉しいと愛くる  
き織手で背中をポンと叩いた。

筆記者まどす 誰か知らん曩に法庭にブラオン師  
の代理として出庭したる一少年ころバツサニーと  
妹背を結ぶ彼の窈窕たるポルチャ貴嬢にてあり  
とはこは讀みもて來るうちには知る人は知るあり  
されど童蒙婦女たちの便をはかり聊か茲に附言  
ときぬ。

一輪牡丹花終

版權登錄

全 明治廿一年七月十二日印刷竣功  
年七月十七日出 版

正價 十八錢

大阪北區堂島濱通一丁目廿四番地

著 者 丸山平次郎

同 東區瓦町四丁目四番地

發 行 者 森 ミツ

西區江戸堀下通一丁目廿六地番

印 刷 者 丸山鼎國

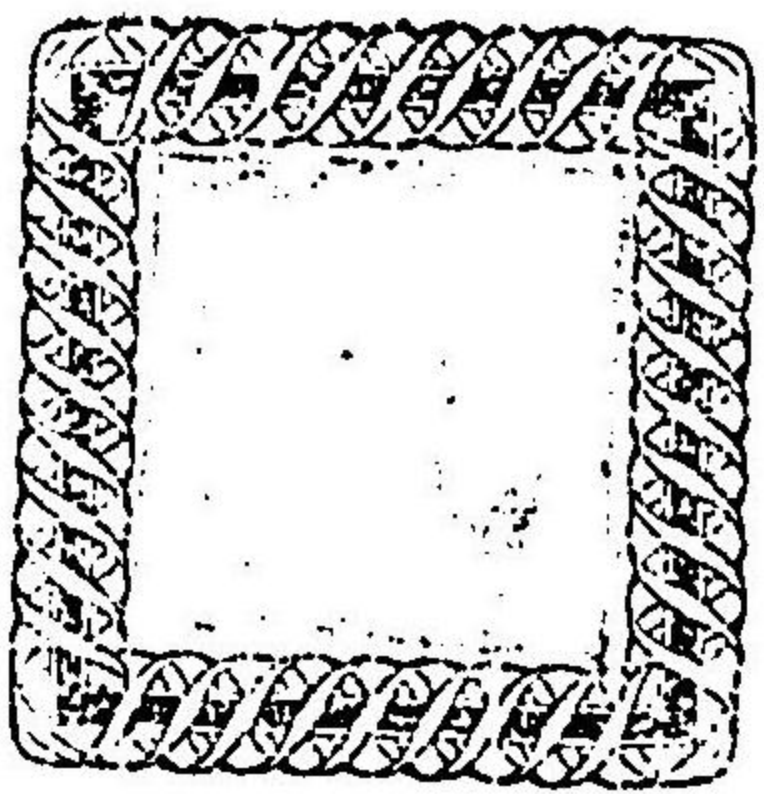
賣 東京日本橋區久松町十五番地 原田博文堂

東區瓦町四丁目心齋橋筋角 中村書店

東區備後町四丁目十一番地 梅原龜七

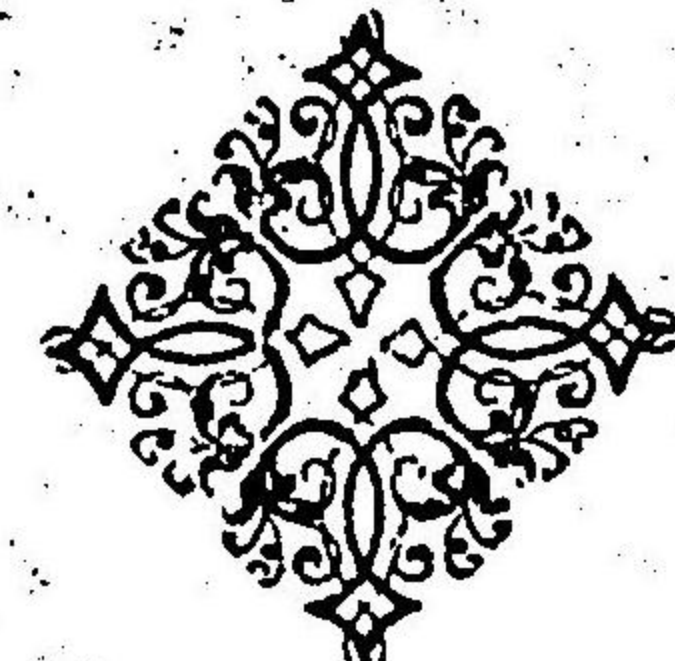
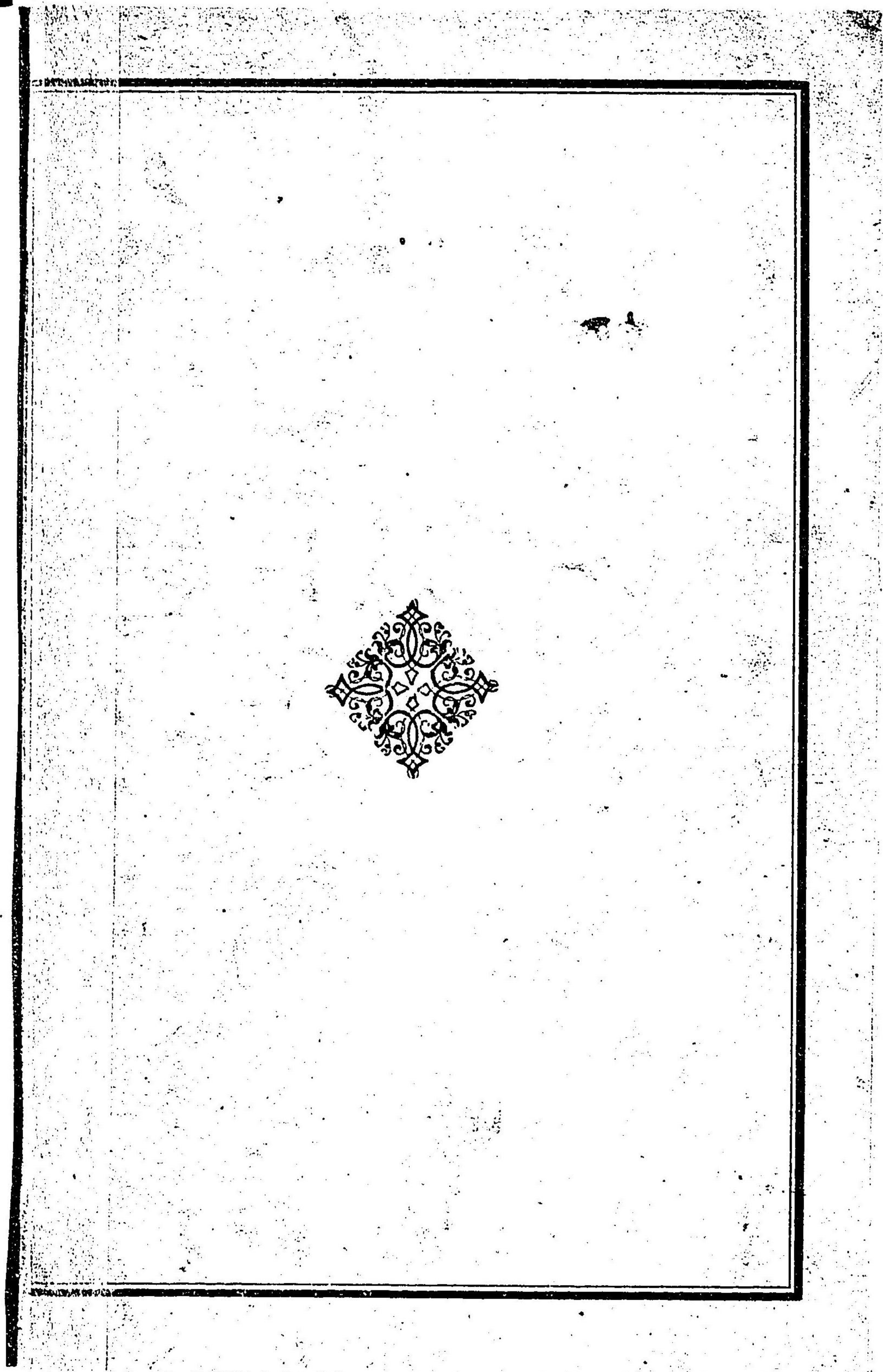
南區安堂寺橋通三丁目三十二番地 田中太右衛門

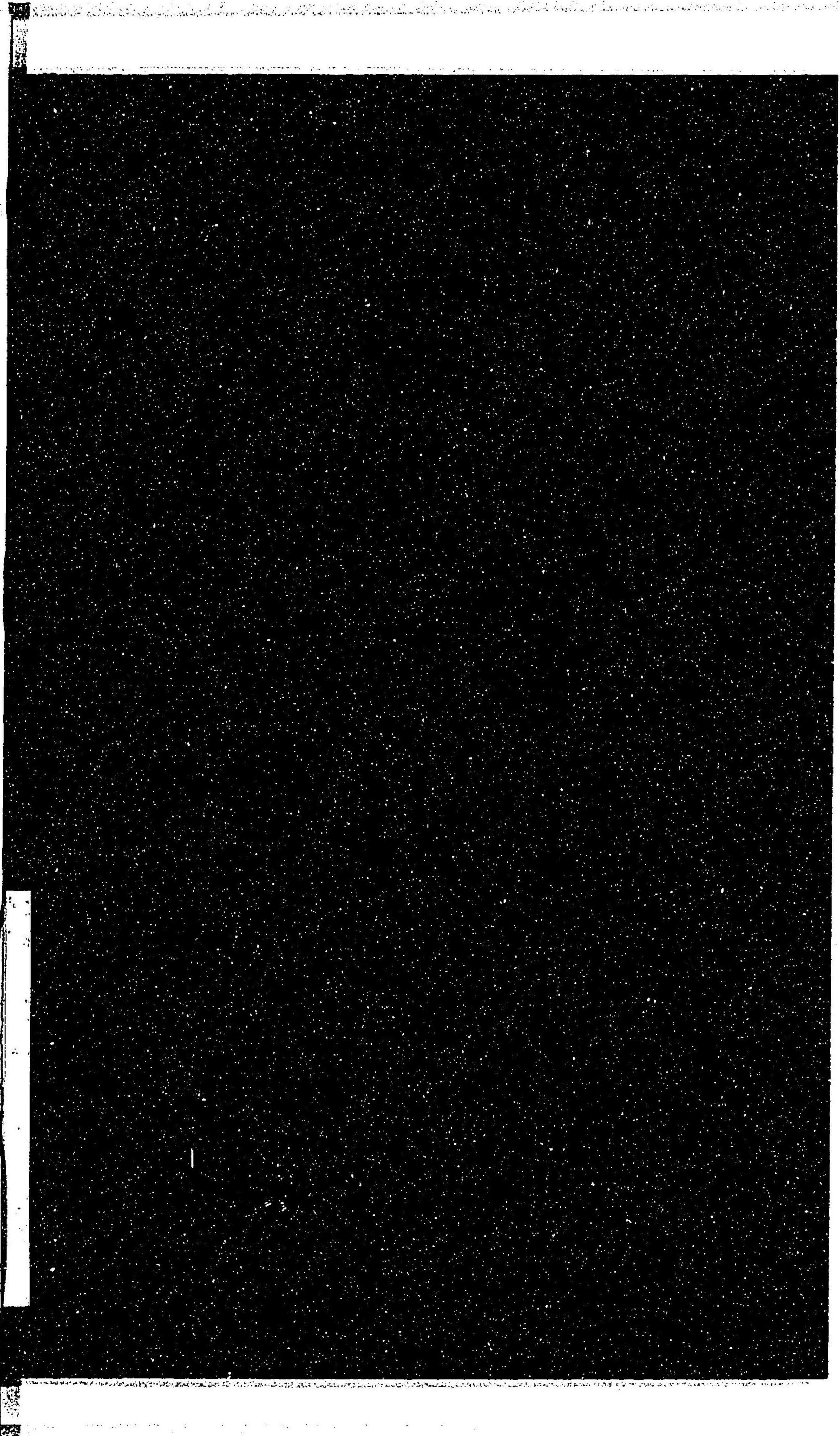
所 京都佛光寺通烏丸東へ入 東枝吉兵衛



正 誤

十三丁より十六丁の間。ハッサリ。とあるはハッサニーの誤。十八丁四行様す。た。同五行ますア。の。ア。惹。二十  
三十五行文。章。は。交。録。二十四丁一行もの。だ。も。い。どの。誤。同四行ッサのッ。は。惹。同六行雜誌の誌。ハ。轉。倒。を。り。





特 13

534

一輪の牡丹花

国立国会図書館

100826-000-0

特13-534

一輪の牡丹花

丸山 竹園/訳

M21

DBY-0070

